

部 長	近藤 健一
研究主任	大槻 直矢
部 員 数	8名

1 研究主題

子どもたちの関わり合いを重視し、基礎基本の定着を図った書の指導

2 はじめに

基礎基本の定着のために書の授業の習慣化、相互評価の定着など年間を通して、書の学びに向かえるように、その方法や効果について授業研究を行った。小牧の「学び合い」の体系を書の授業にも取り入れようと「風車の隊形」による授業展開なども取り入れてきたが、コロナ禍にも対応できるよう、タブレットを活用した相互評価の方法や、本時のねらいの共有など、新たな方法についても実践、研究を行った。

3 研究経過

- 4月 研究主題・研究組織の決定・年間計画
- 5月 実践計画
- 6月 実践交流1
- 7月 実践交流2
- 9月 実践交流3
- 10月 実践交流4
- 11月 実践交流5
- 1月 実践交流6
- 2月 本年度のまとめ

4 研究の概要

担当学年が多岐にわたる部員が事例研究を行う中で、共通して取り入れる実践を決めて取り組みを行った。

(1) 基礎基本の習熟

研究会の中で、生徒がお手本を見ている時間が少ない、お手本と自分の作品を見比べないなどの問題点が挙げられた。そこで、基礎基本の定着のために継続的な課題の設定や、生徒が自分の作品とお手本の違いを見比べ振り返るためのプリント利用など、見比べながらの技術習得に重きを置いた。振り返りがあることで次回の授業での自分の課題も設定でき、お手本に向かう姿勢が向上したという報告も上がった。

(2) 相互評価

相互批評を通して、自分では気づくことができなかった手本との違いや自分の字の良さに気づくことができた。そこで、グループ活動から個に戻し、実際に書く前にどこの部分を意識して書くのかを、お手本に記入させた。また、タブレットを使って作品を写真に撮り、記録を残すことで、最初に自分が書いた作品からの変化や、周りの生徒との作品の共有などに活かすことができた。その一方で小学校低学年では習字道具の準備に時間がかかり、タブレットを活かすまでは難しいとの意見もあり、記録を残せる点では非常に便利だったが、課題もある。

(3) 気をつけるポイントを意識して書く

振り返りをもとに自分で決めた気を付けるポイントを意識して、実際に書く活動を取り入れた。課題で提示されているポイントの他にも「自分が上手に書きたい」と思う箇所を本時の目標に挙げさせることで課題の到達点が生徒自身にわかりやすくなった。

(4) 書の授業の多様化

硬筆の書き写しや、書写の時間が「書の授業」の大半を占めるが、筆ペンを使っての短歌作成を行ったり、筆絵と共に添える文字を書いたりなど筆そのものに触れる時間を増やしていく。また、書の教科書にあるような、書道の文化について学ぶような授業のありかたも「書の授業」だと改めて考えていく。

(5) 全体を通して

今回の研究会では、より基本技術の習得のために自分で課題をもち取り組める姿勢の育成について考えることが多かった。作品を作ることも大切だが、お手本に近づけるためには自分で何が必要なのか考えたり、クラスメイト同士で改善すべき点を挙げたり、褒め合うことも「学び合い」の利用につながるのではないかと考えることができた。また、小学校の書道教育の場面で「準備の大変さ」という問題点が挙げられたこと、小学校学習指導要領の改訂により「水書用筆等を使用した運筆指導」が導入されていることもあり、水書を積極的に取り入れ、授業について考えていく。

5 今後の課題

学年ごとに書写の時間で抱える問題点も異なることに気づいた。小学校低学年になると書道道具の準備そのものが課題になっている。また一つの課題の文字にかけられる時間が少なく、定着する前に課題が進んでいってしまうということもみられた。いかにしっかりと出来ていることを確認して次に進めているか、いつでも自分の技術の向上を確認することができる環境が整っているかというのも今後の課題である。